

# 2

## ことばの成り立ち(進化)を知る

# ことばで測る距離感

— マジックナンバー 150の普遍性と相対性 —



井上 京子  
INOUE Kyoko

慶應義塾大学/理工学部/教授

人間だれしもあいさつを交わす際に快適な距離感があり、それは文化や時代によって異なる。人類の進化に伴って形成された集団の規模とことばの起源の関連性や、COVID-19パンデミックが世界の対人距離感へ与えた影響の可能性について取り上げた。

### 距離感とことば

フランス語のtu(テュ)/vous(ヴ)という二人称代名詞や日本語の敬語のように、人間間の社会的・心理的距離感がことばに現れる現象はこれまで社会言語学分野で多く研究されてきた。また、日本語の指示代名詞などにみられる物理的・心理的距離感の比較言語研究も、言語の普遍性と相対性を再考する題材として取り上げられることがある。

たとえば、日本語のコレ、ソレ、アレの英語訳はthis, it, thatだと日本の学校では習うが、実は必ずしも一対一対応ではない。嗅覚、味覚、触覚など身体性に直接結びつくもので、日本語話者がイマ・ココで自ら体験している対象は必然的にコ系指示詞となる。ところが、英語ネイティブスピーカーにとっては、におい、風、空気というような対象は目にも見えず実体が無いので概念として捉えるほかなく、that指示となるという<sup>1)</sup>(文末の解説コラム)。つまり、日本語話者は空間認知を原則、物理的距離で言語表現化するのに対し、英語話者は物理的距離だけでなく、心理的距離で言語表現化する場合もあり、その違いはネイティブでない話者には直感が働きにくいものらしい。

本稿では、このようなことばで測る距離感について、人類の進化に伴って形

成された集団の規模、そしてことばの起源との関連性に触れ、集団内での結束を強める効果のあるあいさつ・ことばがけがCOVID-19パンデミックによって制限された結果、対人距離感に影響がもたらされる可能性について取り上げる。

### 人類の進化と集団規模・ことばの起源

人類は進化の過程で、5~6家族30~35人規模のバンドと呼ばれる最小規模の集団から始まったと考えられる。社会構造が複雑化するにつれ集団規模は大きくなり、2023年半ば、世界の総人口が80億

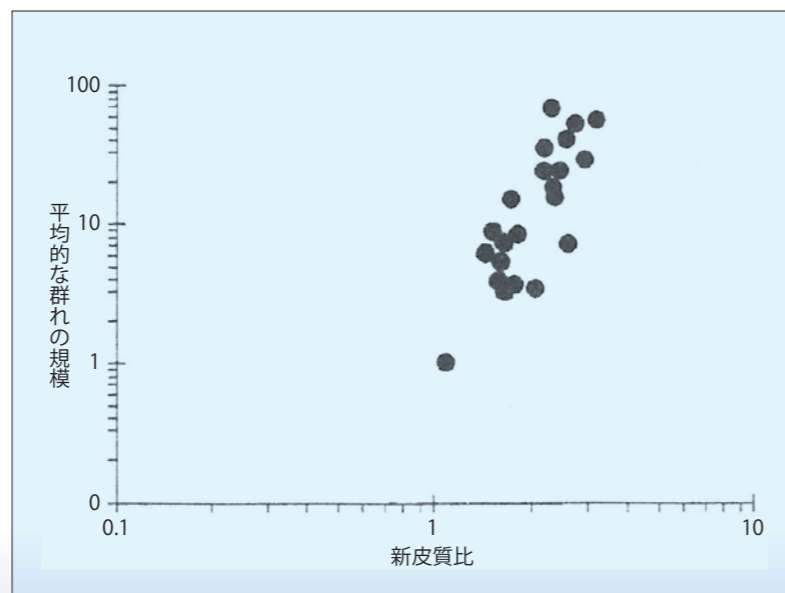


図1 類人霊長類の平均的な群れの規模と新皮質比 (Dunbar 1996)

4,500万人に達するころには、インドや中国のような人口14億を超える国家が現れた (UNFPA 国連人口基金2023年4月19日)。

このような大規模集団とは別に、自然とまとまる集団規模があることは、社会学においても例証されている。たとえば氏族(クラン)、紀元前5千年ごろの近東にあった初期農耕民の村人口、現代のインドネシアやフィリピン、南米の焼畑農業の村人口、キリスト教原理主義共同体の規模、大移住したモルモン教徒の運営集団、アメリカで実施された「小さな世界」実験結果の個人ネットワーク規模、英国国教会の一教区における理想的な信徒数、軍隊組織編制単位の独立しうる最小単位である中隊(カンパニー)等々、いずれも集団の人数がほぼ150人であることが認められている<sup>2)</sup>。

この偶然とも思われるマジックナンバー150は、別の分野からの根拠も示されている。イギリスの人類学者ロビン・ダンバーは、霊長類の群れの規模と、脳の思考をつかさどる部分である新皮質の大きさに相関関係があることに着目し、データを基に、同時に一定数を超えずに維持できる人類の群れの規模を150人と予想している(図1)。この150という数字は、我々がお互いのつながりを知り、社会的関係を持つことができる最大人数を示しているらしい。

卓近な例では、著者の勤務先慶應義塾大学の理工学部1学年約1,000人の学生を11の学科に振り分ける時、最大規模の学科構成人数が150人以下となっているのは、この「自然の集団」理論からすれば、それ以上人数を増やすとまとまりがつかなくなるから、と言えるかもしれない(図2)。

### 音声による毛づくろい: あいさつ、ことばがけで集団結束

霊長類には群れを結束させるメカニズムとして毛づくろいがあることはよく知られている。しかし、個体が集団の中で毛づくろいに時間を費やせる上限

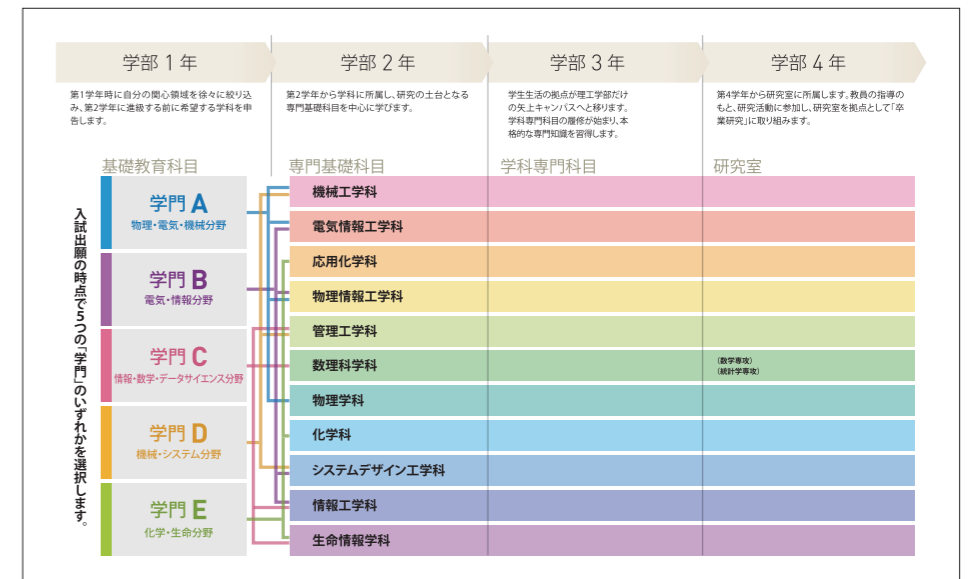


図2 慶應義塾大学理工学部11学科

の規模は、50~55匹までのようで、それより群れが大きくなると別の手段が必要になり、そこにことば、つまり、あいさつなどの音声による毛づくろいが発生したのでは、というのがダンバーの言語起源説である。

言語は集団結束の観点から二つの利点がある。まず、同時に複数の人間と話せるため、一対一の毛づくろいよりも交流の度合いを増やすことができる。また、毛づくろいよりも広く、個人的ネットワークで情報交換できる。これにより同盟者間で信頼を築き、知識を得ることができるようになったというのである。言語起源説にはワンワン説(自然界の生き物の声のまね)、よいこらしよ説(共働説)、情念起源説(喜怒哀楽感情から来る発声)、など種々雑多で検証不可能なものも多いが、ダンバー説はこの点、一考に値する。

### あいさつが交わせる距離150cmとプロクセミックスとsocial distancing

さて、人類がことばを獲得し、コミュニケーションをとる様を研究対象とする人類学において、エドワード・T・ホールは「プロクセミックス」という概念を導入した<sup>3)</sup>。プロクセミックスの研究は「異なる文化に属する人々はちがう言語をしゃべるだけでなく…ちがう感覚世界に住んでいる」ことを検証できる興味深いフィールドである。

特に、人間には誰しもお互いの距離を何cm~何



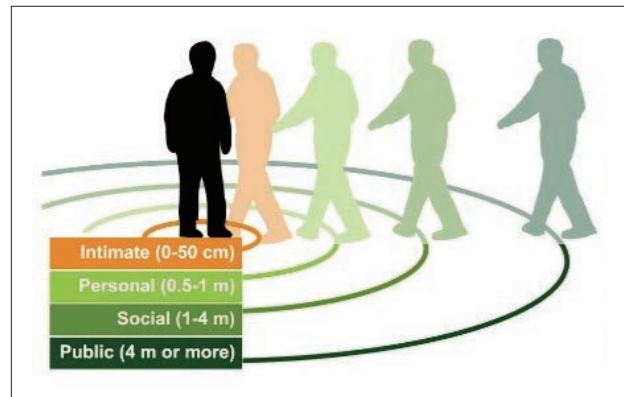


図3 Hallの4つの距離の図 (シャルバンティエ, リュカ フレデリク ジャン作成のスライドより)

mとるのが適切で快適か、ある程度決まった距離感覚が存在するが、その基準は文化ごとに異なることを明らかにし、それぞれ自己に近いゾーンから intimate distance (密接距離)、personal distance (個人距離)、social distance (社会距離)、public distance (公衆距離)と呼んだ。当時のアメリカでの調査結果を見ても、「アメリカ人全般」とひとくくりにはできない基準はないものの、アフリカ系、ヒスパニック系、南欧系などのグループごとにきわめて異なるプロクセミックスのパターンがあることが報告されている (図3)。

「日本人全般のプロクセミックスがあるのか」という疑問には、日本人の対人距離の取り方調査が参考になる<sup>4)</sup>、<sup>5)</sup> (図4)。それによると、会話が成立するのは personal distance に当たる会話域 50~150cm、そして気づまりを感じない程度の距離は近接域 150~300cm、という結果が出ている。この近接域の境界線が150という値であること、および2019年以降世界に蔓延したCOVID-19予防のための指標として示された social distancing (後に physical distancing と改められた) と重なる距離感であることは興味深い。しかしその一方、同じ social distance という名称で呼ばれるこの2つの距離・域はもともと異なる空間を意味していたのだが、後付けで COVID-19 対策用語として用いられたため、誤解が生じることとなった。

ホールの指す social distance は、パーソナルスペース (personal distance の円心領域) を侵さず、かつ知人同士の対人距離として快適に感じる近接域のことだが、もともと文化ごとに異なる物理的距離の social distance だったものに、飛沫感染予防という、

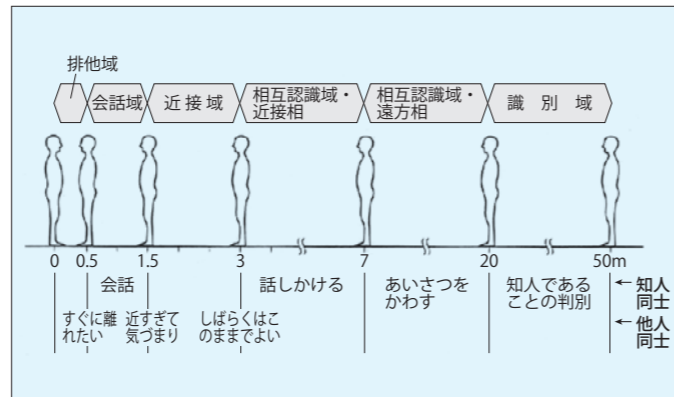


図4 日本人の対人距離図 (西出1985, 大坊1998)

文化の境界線を越えたグローバルスタンダードの物理的距離が上書きされることにより、距離感覚の文化によるバリエーションがコロナ蔓延時は地球上から消滅したことになる (WHO 世界保健機構は COVID-19 進行過程でガイドラインを何度か修正したが、2023年4月現在、physical distancing を世界基準一律 1m と規定)。

コロナ第8波が収束するにつれ、日本でもこの強制的な social distancing は緩和されつつあるが、人々の対人距離感覚、つまりどれくらい他者から離れていけば快適に感じるか、COVID-19 以前の多くの日本人が共有する近接域数値に戻るのかという点については、今後継続的な調査が必要であろう。もちろん、日本以外の国々の状況も比較調査する必要がある。

たとえば、CDC アメリカ疾病対策予防センター推奨の physical distancing は現在、6ft=1.8m であるが、ホールの調査でエスニック・グループごとにみられたプロクセミックス・パターンがはたして「アメリカ人全般」に上書き、一本化されたのか、そしてその後、元に戻ったのか、についても気になるところである。

### COVID-19 がもたらした距離感への影響: マスクで隠されるコミュニケーション情報~目でモノを言う日本人、口元でモノを言う欧米人~

マスク着用が円滑な会話を阻害するとして、日本よりずっと早い段階でマスク外しが欧米で一般化した背景には、目でモノを言う日本文化、口元の表情でモノを伝える欧米文化、といった違いがあることは通説となっている。この説からすれば、マスクを着用していても目の表情から話者の意図を読み取



写真1 日吉バビリオン憩いの場

るのが上手な日本語話者は、マスクである程度飛沫感染を防げるから近接域 social distance を COVID-19 以前に戻してもよいはずなのに、未だ対人距離は COVID-19 以前に戻っていない。そこで著者は同僚とともに、リモートからキャンパスに戻ってきた学生のための憩いの場を創出し、プロクセミックス研究

の実験的フィールドとなるプロジェクトを2022年立ち上げた (写真1)。

他方で、口元を隠してしまうマスクはコミュニケーション情報の重要な部分が損なわれるから、といった理由でマスク無しの会話が社会全体でおおむね復活しているアメリカ、イギリス、フランスなどでは、飛沫を浴びないように、より遠い対人距離を取りそうなものなのに、近接域 social distance も COVID-19 以前に戻っているように見受けられるのは不可解な現象である。

<参考文献>  
 1) 新村朋美 「日本語と英語の空間認識の違い」言語 35 (5): 35-43, 2006.  
 2) Dunbar, Robin, Grooming, Gossip, and the Evolution of Language. Harvard Univ. Press, 1996. 松浦俊輔・服部清美 (訳) 『ことばの起源: 猿の毛づくろい、人のゴシップ』青土社, 1998.  
 3) Hall, Edward T., The Hidden Dimension. Anchor Books, 1966. 日高敏隆・佐藤信行 (訳) 『かくれた次元』みすず書房, 1970.  
 4) 西出和彦 「人と人との間の距離 (人間の心理・生態からの建築①)」, 建築士と実務 5: 95-99, 1985.  
 5) 大坊都夫 『しぐさのコミュニケーション』サイエンス社, 1998.  
 6) 新村朋美, ハヤシ・ブレンダ "This, That and It from a Cognitive Perspective" 日本認知言語学会第8回大会 Conference Handbook 276-279, 2007. ; 日本認知言語学会論文集 8: 439-449, 2008.

## 解説コラム

### イマ・ココの客観性・主観性: ことばに現れる物理的距離と心理的距離の日米語比較<sup>6)</sup>

スヌーピーで日本でも有名な PEANUTS の4コマ漫画を用い、主人公チャーリー・ブラウンのセリフの指示代名詞部分を空欄にして、日米被験者に穴埋め問題を解かせてみると、母語が異なると回答結果も大きく異なる傾向がみられたという。特に興味深い場面としては、雪玉をせっせと転がし、出来上がった雪だるまを目の前にしてチャーリーが一言、

"What a struggle ( ) was!"

この空欄を埋めるにふさわしいと思われる英語指示代名詞の回答結果は以下の通りだった。

英語話者	指示代名詞	日本語話者
0%	this	40%
100%	that	11%
0%	it	49%

雪だるまを作っていたチャーリーがその大変な作業を終えて (脱現場化)、その成果を一步引いた視点から客観視して発話するセリフとして捉えた英語話者は、全員 that を用いている。ところが、日本語話者は、チャーリーから手の届く距離にある (物理的距離が近い) ものを指す日本語表現「コレ」または「ソレ」を英訳し this, it が半々、回答者のほぼ9割に達している。これは、空間認知を物理的距離で言語表現化する日本語話者の特徴が、第二言語使用時にも反映されていると考えられる。